

---

The world which is in a state of flux(仮題)

樋口

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The world which is in a state  
of flux (仮題)

### 【Nコード】

N5513Z

### 【作者名】

樋口

### 【あらすじ】

人のように考え、人のように動き、自律成長プロトコル アル  
ゴリズムによる精神の成長を可能とする人工知能の実現すら叶う時  
代。

二十二歳という若さで名だたる著名画家の仲間入りを果たした詩歌  
の元に、ある日身に覚えのない荷物が届く。

送り主の分からない怪しげな荷物を訝りつつも、閉塞した気分が紛  
れるならと一時の酔狂に身を委ね、開封して調べてみることに決め

る。

果たして、中に入っていたのは用途の不明な機器と、一枚の紙片であった。

これだけでは掴めない。

詩歌は機器の特徴ある形状と紙片に書かれた文字を頼りに、次世代のマルチメディアプレイヤーとして普及している『CCO』で検索を試みる。

若干長めの接続時間のあと、表示されたのは膨大な数の検索結果。

その中で一際目を引く“『』公式情報サービス”というページを覗き、概要説明文にあった『新しい世界』というフレーズに惹かれた詩歌は、数多ある他のホームページに目を通してから規定の手順に従い、電子世界と呼ばれる未知の領域へ飛び込む。

ただひとつ、自身の性別を男性と偽って。

## 第一章“幸せの絵画”二話

画材が到着する日、詩歌は朝から憂鬱な気分でリビングに寝そべっていた。

ガラス張りの窓からどんよりと曇っている空が見えて、気持ちの沈みに拍車をかける。

今ばかりは嫌いなリビングも気にならない。

原因は一本の電話だった。

『近々、お前の伴侶となるに相応しい男を紹介する』

父からの言だ。

やたらと話が長かったけれど、簡潔にまとめるとこの一点に凝縮されるのだろう。

後は振る舞いについての叱咤と、言葉面をなぞる程度の激励。

この二つのやり取りは毎回と言っていいほどあり、半ばルーティン化されているので然程重要ではない。 てつきり、今回も決まり切った話をするものとはばかり思っていた。

……あと、いつもと違う言葉が交わされることにほんの少しの期待も。

電話が終わった今、気分はどん底だった。

悪い意味で裏切られた期待。

紹介するだけ、とは言っても、父の中で婚約は既に決定事項なのだろう。

式の日取りも式場も、果てはウェディングドレスや参列者の選定すら始まっているのだと確信できた。

違うとすれば神前式かもしれないというくらい。

昔からそうだった。

父は恐ろしいまでに玄人主義を信奉する人で、選良という枠から外れることを酷く嫌う。

娘である自分をよかれと思う方へ牽引し、同時に父の社会的立場を揺らがせない保険ともする、徹底した合理精神の持ち主でもある。

進路に関することは父が取り決め、自分はそれに唯々諾々と従うだけでいい。

父は心の底からそう考えているのだ。

まだ小さかった頃から、父は必要以上の関心を自分に持たなかった。

いつも念頭にあるのは、如何に下手な振る舞いをさせないかであって、意思は二の次だった。

医者や弁護士、学者に議員、実業家など、辣腕の人間ばかりを生み出す織倉の血筋。

そこにあつて、自分は一人前と認められていないのだと、かつての詩歌は考えた。

絵の世界でなければ、商社の役員にでもなっていたらろう。

しかし描画の才があると知り、中でも『悲劇』や『惨劇』を表現する適性は類い稀だと気づいた時、詩歌は『幸福』を描くことをやめた。

ひたすらに『悲劇』や『惨劇』の絵を描き、才に磨きをかけ、その末に描いた絵で名誉ある賞を受賞した日、父から本邸に来るよと言われた。

狂喜した。

いつもなら電話の口頭で済ませるのに、今日は直接会うと言う

のだ。

今にも踊り出しそうな心を必死で抑え、自然と弾む声で了承する。

これで父に認めてもらえる。

いつもは威圧的に映る本邸が、その日は快く迎えてくれているように見えた。そして、急ぎ本邸に向かった先で言い渡されたのは、転居を促す遠回しの命令と、立ち居振舞いに一層気を配るよう念を押す言葉。それだけだった。

肩を落として消沈する帰り道、考えたのは、もっとたくさんの結果を示さなければいけない。

そうすれば、いつかきつと認めてもらえる。

そう、自分に言い聞かせた。

それから今に至るまで精進を心がけ、幾つもの栄えある賞を獲って。

経歴にそれらが積み重なるのと同じ数だけ落胆した。

今や、国内外にその名を轟かせていると自負してもいいほどになった。

なつて、しまった。

床に華奢な身体を投げ出したまま、詩歌は自分の肩を抱く。

結局、自分はどこまでいっても、都合の良い人形でしかないのだろうか。

視界に入っているフローリングの若木色が滲む。

泣いているのだと気づいた。

一度でもいい。

父に、母と妹に、自分を見て欲しかった。

絵に描いたものじゃない、本当の笑顔で笑いかけて欲しかった。

そう思うのは、間違っていたのだろうか。

自分には過ぎた願いだったのだろうか。

……分からない。

詩歌は抱いている肩を更に抱き締めた。

強く、強く、肌に爪が食い込むまで。

このまま、好きでもない人と結婚して生きていく。

あるかどうか分からない希望にすがって、『悲劇』や『惨劇』  
を描き続けて。

限界だった。

度重なる落胆に疲弊して傷だらけの心が、精一杯気丈に振る舞  
っていた心が、砂の城を蹴飛ばしたように崩れていく。

痩せ我慢で塗り固めた心は、砂上の楼閣でしかなかった。

不意に、来客を知らせる甲高い電子音が鳴り響く。

失意に暮れていた詩歌は最初のうち、気づきもしなかった。

しかし繰り返し鳴らされると漸く気づく。

緩慢な動きで立ち上がり、よたよたと玄関に向かう。

一体何の悪戯だ、と思った。

予定していた画材の配達は恙無く行われた。

やたらと高張る不審物も込みで。

ただし、

「……何、これ」

画材の荷をほどくのも忘れ、不審物に貼られた配達明細を記載しているラベルへ飛びついた。

宛名、織倉詩歌<sup>おりくらししか</sup>。

住所、ここ。

宛名は間違っていない。

差出人、内容物、不明。 警告、天地無用。

これで明細とは片腹痛い。

詩歌は至極真つ当な感想を抱いた。

「……とりあえずどうしよう」

字面にすると狼狽しているようでいて、実際、あまり動じていなかった。

開けずに警察へ届け出るのが賢明だと分かっているからだ。

何事かで恨みを買って危険物が送られたのかもしれないし、こんな愉快な悪戯で楽しませてくれる知人は残念ながら思い当たらない。

とは言え、今すぐにどうこうしないといけないものではない、と詩歌は判断した。

今の時代、宅配物について宅配業者の監査はとんでもなく厳しい。

そのため、爆発物だろうが何だろうが中を開けずとも見抜いてしまうのだ。

加えて立場上、専属の警備業者とも契約を交わし、配達される

ものに異状がないか二重の監査が入ったのち、警備員によって届けられるのでまず危険を回避できる。

理想としては、不審物を自分の手元まで届かせないで欲しい。が、詩歌には便宜上、差出人不明の荷物を定期的に受け取らなくてはならない事情があった。

単身、実家から離れたところで暮らしている、妹の身の回りを調査した書類だ。

この荷物を受け取った時　いや、今もずっと、誰かと話すのが億劫だったので、ろくに確認もせず、予期しない差出人不明の荷物を受け取ってしまった。

……まあいい。

詩歌は不審物を放置し、丁寧に包装された画材の箱を開く。

中身に過不足はないようだ。

早速取り出して作業に取りかかる、ことはしない。

全くと言っていいほど、描こうとする気が起こらなかった。

ここ数年、何かに追い立てられるように絵を描かなければいけないと感じていたのに。

あの不審物を開けてしまおうか。

気づけば、そんなことを考えていた。

迂闊なことこの上ないが、何かで気を紛らわしたかった。

もしかすると、自分の人生に幕を引く勇氣は持てないから、不慮の事故を期待しているのかもしれない。

思考を巡らせば巡らすほどに気持ちが塞ぐ。

開けてしまおう。

暗澹と渦巻く感情に誘われるまま、詩歌は不審物のビニールテープを外していく。

大きな箱だ。

高さは百六十センチほどある詩歌の膝上まであり、幅も肩幅より広い。

外開きの上蓋に手をかける。

中に入っていたのは、奇怪なオブジェを連想させる機器類と、一枚の紙切れだった。

お馴染みのぷちつと潰す緩衝材に梱包されている機器類は一先ず放っておき、紙切れを手に取る。

『エーリュシオンモジュールver・R起動プロセス』

A4サイズとおぼしき用紙の頭には印字体でそう書かれていた。そこから先の行は起動手順らしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5513z/>

---

The world which is in a state of flux(仮題)

2011年12月19日21時54分発行